

土壌水分管理と適期防除で 品質・収量を確保しよう！

長岡農業普及指導センター
大豆情報 No.3

代表電話 0258-38-2557
E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

1 土壌水分の管理 ～天候に応じた暗渠栓の管理等により、土壌の過乾燥を防ぐ～

(1) 干ばつ対策

開花期から粒肥大初期は、茎葉の生長と粒の肥大が重なり、多量の水を必要とする。この時期に土壌水分が不足し干ばつ害を受けると、莢数や粒大が低下して減収するため、ほ場条件等を確認したうえで、以下の対策を実施する。

ア 暗渠栓を閉じる

暗渠栓を閉じ、土壌水分を維持することで、落花・落莢を軽減する。ただし、降雨等により地下水位が急激に上昇する場合には、速やかに暗渠栓を開放する。

イ 畝間かん水

a 実施時期

開花期から1か月間（7月下旬～8月下旬）

b 畝間かん水のめやす

次表の環境条件(①～③)+ほ場条件(A、B)のすべてがそろった場合に実施

かん水の環境条件	かん水ができるほ場条件
① 日中、一番上の葉の半分以上が直立している。	A 暗渠、周囲明渠、弾丸暗渠等の排水対策が施工されている。
② 条間の土が白く乾いている。	B 排水が良好であり、24時間以内に地表水が排除できる。
③ ①②の条件下で、さらに晴天が3日以上続く見込みである。	

c 畝間かん水のポイント

- ① かん水は、地温や水温の高い日中を避け、早朝や夕方に行う。
- ② 地下かんがいでは畝間に水が染み渡る程度まで、地表かんがいでは水尻側の畝間まで水が行き渡る程度までかん水する。
- ③ 区画の大きいほ場では、一度に大量にかん水を行うと、水口側で湿害を起こす恐れがあるため、数日に分けて徐々にかん水する。
- ④ かん水を行う場合は、必要に応じて8月末までに1～2回行い、2回目は7日以上の間隔をあけて行う。

地域の用水の状態に配慮して畝間かん水を行いましょう。

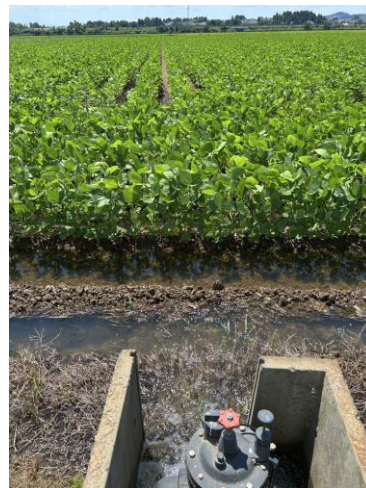


写真1 畝間かん水中のほ場

(2) 降雨後の排水対策

大雨の後は、速やかに地表水を排除することが重要。安全確認を十分に行ったうえで、水路、ほ場内の排水溝の整備・点検を行う。明渠に「つまり」や「くずれ」があれば補修する。

- 農作業事故に注意しましょう。特に草刈り作業は周囲に気を配ってください。
- 農作業時の熱中症に注意をしましょう。こまめな休憩と水分補給が大切です。

2 開花期及び基幹防除時期 ～ほ場ごとの開花期に基づき、適期に防除を実施～

(1) 開花期のめやす

品種名	は種期	開花期予想
エンレイ	6月1日頃	7月22日
里のほほえみ	6月10日頃	7月26日

※開花期は、1花でも開花した株が全株数の40～50%に達した日。

(2) 防除の時期と対象病害虫

防除時期 パターン	開花期後21日頃	開花期後28日頃	開花期後35日頃	8月5半旬 ～9月上旬
紫斑病1回散布の場合	—	紫斑病・子実害虫	—	マメシクイガ*
紫斑病2回散布の場合①	紫斑病・(害虫)	紫斑病・子実害虫	—	マメシクイガ*
” ②	—	紫斑病・子実害虫	紫斑病・(害虫)	マメシクイガ*

※防除方法及び薬剤は、各JAの栽培暦に従って実施する。

★ポイント1：莢に薬剤がよく付着するようにていねいに散布する。

★ポイント2：周辺に他の作物がある場合は、飛散しないよう注意する。

3 その他の病害虫防除

(1) ウコンノメイガ ～7月中下旬の降雨が多いと発生しやすい～

○ウコンノメイガは、前年多発生した地域や、生育旺盛なほ場で多発生しやすい。

○葉巻の発生初期に遅れずに防除を行う。

○防除のめやす：7月第6半旬（7/26～31）の畝1m当たりの平均葉巻数が24個以上あれば、防除が必要。

(2) 葉焼病（右写真）～里のほほえみで発生しやすい～

○被害茎葉で越冬し、強風雨で感染・発病が進展する。

○葉に淡黄色～褐色の病斑が見られる。

○拡大が見られる場合は、普及指導センターに相談を（発生初期の防除のため）。



写真2 葉焼病の葉表面の病斑

(3) ウイルス株の抜き取り ～褐斑粒の原因を除去～

【ウイルス感染株の症状】

濃淡の入り混じったモザイク症状や水疱状の凹凸が葉（特に新葉）に出る、株が萎縮している等

○開花期頃が最も病徴が見分けやすいので、ほ場をよく観察する。

○見つけ次第、抜き取ってほ場外に出す。

(4) その他

○ハダニ類等高温時に多発する害虫や、アブラムシ類等の発生動向を把握し、被害が見られ、拡大が懸念される場合は早めに防除を行う。

4 雑草対策

開花始めまでに中耕・培土ができなかった場合や、株間の雑草の取りこぼしがある場合は、早急に生育期除草剤を散布する。

【農薬を使用する際の注意点】

①農薬を使用する際は、使用方法・注意事項等を必ず確認して使用すること。

②農薬散布時は周辺への飛散、使用者自身の安全に十分注意すること。

③農薬使用後は防除歴として、記録・保管すること。